

# 2020年度 調査研究助成 募集のお知らせ

若手研究支援枠 (今年度新設) / 一般枠 / 継続枠

## 問題の現場で 学び、考え、行動する 市民科学者を応援します。



高木仁三郎(1938-2000)

大学生・大学院生時代に高木基金の助成を受けたみなさんが活躍しています



大学院時代から水俣病患者の生活被害と人権問題の研究に取り組む。現在も水俣市で福祉の仕事に就きながら、水俣病被害者救済の活動を続ける。

▼ 永野いつ香さん  
2005/2017年度助成先



マーシャル諸島でピキニ水爆実験の影響について現地調査を行った。一貫して「グローバルヒバクシャ」をテーマに研究を続けている。現在は、明星大学人文学部准教授。

▼ 竹峰誠一郎さん  
2002/2005年度助成先

▲ 澤田慎一郎さん  
2005年度助成先

大学時代に大阪・泉南のアスベスト問題の調査を行い、被害の深刻さ、労働環境の過酷さを学ぶ。卒業後は全国労働安全センターに就職し、現在も被害者や家族の支援活動を続けている。



▲ 森 明香さん  
2008/2013年度助成先

川辺川ダム問題をテーマに、熊本県人吉市に住み込み、「受益地」におけるダムをめぐる論争について分析した。現在、高知大学地域協働学部助教。



【助成対象】 「市民科学」の考え方に基づく調査研究であれば文系・理系は問いません。大学生・大学院生など若い世代の方からの応募を歓迎します。

【助成期間】 2020年4月～2021年3月

【助成金額】

助成枠	予算	1件あたりの助成金額
若手研究支援	100万円	30万円まで
調査研究(一般)	600万円	100万円まで
調査研究(継続)	300万円	原則50万円まで

【応募期限】 2019年12月10日 (消印有効)

高木基金のウェブサイト過去の助成事例を掲載していますので、あわせてご覧ください。



認定NPO法人  
高木仁三郎市民科学基金

〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町4-15 新井ビル3階 TEL・FAX : 03-3358-7064  
E-MAIL : info@takagifund.org WEB : http://www.takagifund.org/

**高木仁三郎市民科学基金（高木基金）**は、生涯をかけて、原子力時代の一日も早い終焉を目指し、2000年10月に62歳でこの世を去った「市民科学者」、高木仁三郎の遺志により設立されました。高木仁三郎は自分の遺産を元に基金を設立し、彼の生き方に共鳴する多くの人から広く寄付を募って、次の時代の「市民科学者」をめざす個人やグループに対し資金面での奨励・育成を行ってほしいとの遺言を残しました。

## ● 高木基金の目的

高木基金の目的は、現代科学がもたらす問題や脅威に対して、専門的考察に裏付けられた批判を行える「市民科学者」を育成・支援することです。

未来を切り拓く科学は、政府や産業界の出資と管理のもとで進められる科学者の職業的営みからではなく、真の公共性、公益性を体現した市民の自発的活動の中からこそ生まれてくるはずだという期待を込めて、高木基金では、NPO・NGOや市民グループで活動しながら「市民科学者」をめざす人を積極的に応援したいと考えます。

### 高木仁三郎の生涯（1938－2000）

#### …脱原発の核化学者・市民科学者として…

高木仁三郎は1945年、小学一年生で敗戦を体験しました。彼は少年時代、日本人の思考や行動の非科学性が、あの無謀な戦争へと日本を駆り立てたという主張に子供心に納得し、科学に未来の夢を描き、長じて核化学を専攻しました。

日本の原子力産業の黎明期にその開発事業の研究所に入り、後に大学で研究に従事して、62年の人生の40年以上を「核」と共に歩きました。最初の三分の一は体制内研究者、残りの三分の二は独立した批判を行う市民科学者として活動しました。1973年に35歳で大学を辞し、一市民として「自前（市民）の科学」をめざし始めました。

原子力利用はその出発から民主主義社会とは相容れないこと、放射能制御は人間の能力を超えることを指摘し、原子力発電を、とりわけプルトニウムの利用を鋭く批判しました。原子力の情報が、政府、原子力産業・電力会社等の推進側に独占されていることを批判し、その公開を強く求めました。市民の側から、科学的裏付けに基づいて原子力の危険性をわかりやすく解説し、市民が本当に必要とする情報を提供する非営利組織「原子力資料情報室」の設立・運営に力を尽くした彼は、現在の巨大科学のあり方を根本から批判しました。

このような彼の活動に対して、「プルトニウムの危険性を世界の人々に知らせ、また情報公開を政府に迫って一定の効果を上げるなど、市民の立場にたった科学者として功績があった」として、1997年に「もうひとつのノーベル賞」と呼ばれるライト・ライブリフッド賞が授与されました。

その賞金をもとに彼は、1998年に市民科学者を育てる「高木学校」を開校しましたが、その矢先に大腸癌が発覚、癌治療の傍ら市民科学に取り組む後進の育成にあたりました。しかし、癌の進行は早く、2000年夏には活動の続行は不可能になり、高木基金の設立を遺言に残しました。彼は核化学者と市民のはざまに引き裂かれ、悩みながらも、核のない世の中の実現にその生涯を捧げ、行動し続けました。

人から人へ、世代から世代へ、あきらめずに、同じ志を持続すること。それが理想を現実に変える力となり、現実を変えることができる、と高木仁三郎は信じていました。彼は、その志を持続させる原動力が「希望」だと考えました。

「生きる意欲は明日への希望から生まれてくる。反原発というのは、何かに反対したいという欲求でなく、よりよく生きたいという意欲と希望の表現である」（岩波新書『市民科学者として生きる』より）との言葉に、高木仁三郎の思いが凝縮されています。

## ● 市民科学とは

市民科学の課題は、高木仁三郎によれば、「未来への希望に基づいて科学を方向づけ、持続可能な未来を築くための構想を提示し、人々の心に希望の種を播き、組織し、変革への流れを生むこと」です。市民科学は、市民社会が実際に直面する不安や問題から出発し、その成果も市民の評価に委ねられます。

市民科学者という表現には、学術研究を職業とする者だけが科学者なのではなく、市民が科学知識と批判力を自分たちのものにする必要があるという考えが込められています。市民科学は、市民の立場に立ちつつ、市民の知を、専門性を持って市民の側から組織していくことをめざします。科学の暴走をくい止め得るのは、まさにそうした「カウンター・エキスパート」としての市民に他ならないでしょう。

地球市民としての自覚のもと、科学的知識と考察に裏付けられた構想力と想像力を備え、独立した批判を行える人が、市民科学者です。

市民科学者には、次のような役割が期待されます。

- 1) 現代の科学技術が、人々の生存と地球環境への脅威となっていることを認識し、市民と不安を共有する立場からこれを批判し、対抗的な評価を提起すること。  
何が脅威であるかを明らかにし、それを取り除くための調査・研究を進めること。
- 2) 自ら市民として、常に生活者の感覚や視線でものを見ることに基盤におきながら、科学技術の問題にアプローチすること。
- 3) 最終的な政策決定者は市民であるという立場から、市民との密接な相互作用を通して、市民の判断材料となる情報を提供し続けること。  
政府や産業側の科学技術情報を批判的に解説し、その情報がどのような意味や影響を持つのかを、市民に理解可能なかたちで伝えること。
- 4) 現代における科学技術の選択が、将来の世代にどのような負担をもたらすかを常に吟味し、世代間倫理に基づく問題提起を行うこと。

## ● 高木基金の助成の視点

高木基金が助成する調査研究は、前記の市民科学の実践として、次の要件を満たすことが望まれます。

- 市民社会や地球環境の脅威となる科学技術や、それに関わる公共政策の問題点等を批判的に検証するもの。
- 専門性に裏付けされた想像力と構想力を持ち、調査研究・研修の方法や実施計画、予算などが合理的であるもの。
- 調査研究の成果を、市民社会に還元する方法や、政策転換を求める道筋などを具体的に展望しているもの。
- 今回の調査研究のみにとどまらず、将来にわたって、市民科学者を目指して努力していく意志を持っているもの。

なお、限られた財源の中で、市民科学にふさわしい調査研究を重点的に助成するため、次のような申請は助成対象としない場合がありますのでご注意ください。

- ・公的な助成金や、企業などから十分な支援が得られると思われる内容・水準のもの
- ・相当の規模や実績を持ち、独自の資金調達で活動ができると思われる団体からのもの
- ・外部の研究者への委託研究を主体とするもの
- ・キャンペーン活動、映像等による記録、情報発信等を主とした活動（過去には、助成の対象としていましたが、今回は、具体的な調査研究活動を優先します）

# 高木仁三郎市民科学基金 第19期(2020年度)助成の応募方法

助成枠と対象者	助成枠	予算	1件あたりの助成金額	対象者
	若手研究支援	100万円	30万円まで	厳密には定めませんが、20代から30代前半の個人を想定しています。学歴や研究者としての資格等の条件はありません。
	調査研究(一般)	600万円	100万円まで	高木基金にはじめて応募する、あるいは高木基金から過去に1回、助成を受けた実績のある個人・グループ。
	調査研究(継続)	300万円	原則として50万円まで	高木基金から2回以上の助成を受けた実績のある個人・グループ。
	予算総額	1,000万円		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ・団体での応募の場合、法人格等の制限はありません。一般の市民グループも助成の対象となります。</li> <li>・調査研究(一般/継続)枠については、大学や研究機関などに所属し、科学研究費などの獲得が可能な方からの応募も受け付けますが、選考に際しては、そのような研究費等の獲得が難しい立場の方からの応募を優先します。</li> </ul>			
市民科学の考え方・選考の視点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の科学技術や公共政策が、市民社会や地球環境の脅威となっているような問題について、行政や企業の利害とは独立の立場から、その問題の所在を示し、問題をめぐる状況の分析・解明を試み、解決への道筋を探るような取り組みを重視します。</li> <li>・大学、研究機関や学会などにおける研究や議論が不十分な課題など、既存のアカデミズムが、脅威にさらされる市民の不安に十分に答えていないテーマに取り組むものや、既存のアカデミズムのあり方を問い直すような調査研究を重視します。</li> <li>・現代における科学技術や公共政策の選択が、限られた地球資源の浪費・喪失により、持続可能性を危うくし、将来の世代に大きな負担をもたらすという世代間倫理の視点を重視します。</li> <li>・若手研究支援枠については、現時点での調査研究計画や研究成果の見通しよりも、社会的な課題に真剣に向き合い、問題の現場で学び、よりよい未来を目指そうという意欲や姿勢を重視します。</li> <li>・「市民科学者として生きる」(岩波新書)などの高木仁三郎の著作を読み、市民科学への理解を深めた上で応募していただくことを強く推奨します。高木基金の過去の助成実績については、高木基金のウェブサイトに掲載していますので参考にしてください。</li> </ul>			
助成対象期間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・原則として2020年4月～2021年3月の間に実施される調査研究を対象とします。</li> </ul>			
申込み方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高木基金のウェブサイトから助成申込書をダウンロードし、必要事項を入力の上、出力した書面を郵送して下さい。同時に入力済みの助成申込書を電子メールで高木基金事務局へ送信して下さい(書面の申込書を正本とし、電子メールのみの申込みは認めません)。</li> </ul>			
募集期間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2019年11月10日～12月10日(当日消印有効)</li> </ul>			
事前相談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正式の応募前に、希望に応じて事務局が「事前相談」を受け付けます。高木基金に初めて応募をする方は、事前相談を利用することをお勧めします。事前相談を希望の方は、助成申込書の下書きを作成した上で、原則として11月30日までに、メールか電話で事務局に申し込んでください。募集期間終了間際の事前相談には対応できない場合があります。</li> </ul>			
選考のながれ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選考委員会で書類選考を行い、結果を2020年2月中旬頃までに応募者全員に通知します。</li> <li>・書類選考通過者には、原則として、2020年3月中旬頃に都内で実施する公開プレゼンテーションに参加し、調査研究計画を発表していただきます。なお、公開プレゼンテーションでは、市民科学に関わる新しい課題を発掘することを重視するため、過去に助成を受けた調査研究を継続する内容の応募については、理事会の判断で、公開プレゼンテーションを省略することがあります。また、書類選考通過者が、公開プレゼンテーションの当日に参加できない場合など、別の日程で、高木基金の理事による面接を行う場合があります。</li> <li>・公開プレゼンテーションでの発表・質疑応答等を踏まえ、高木基金の理事会で助成先の最終決定を行い、2020年3月下旬までに助成先および助成金額を通知します。</li> </ul>			